

4年間在籍した白眉を離れ、1年ほど前に生命科学研究科に異動しました。白眉時代に居候していた研究室にそのまま居着いてしまったかたちです。生命科学研究科は、1999年に設立された比較的新しい研究科です。日本では伝統的に、主に理学、農学、薬学、および医学の研究室が生命科学研究を担ってきましたが、生命科学研究科ではこれらのバックグラウンドを持つ研究者が一つの研究科に集まって相互作用しながら、広く深く生命を理解して応用に繋げようとしています。そのため、何かにつけて研究科内の交流をととても大切にしていると感じます。特に毎年開催される研究科全体のシンポジウムでは、全ての教員が2年に一度は発表をおこなっており、それぞれの教員が現在何を研究しているかが分かるように工夫されています。

白眉センターを出たら研究以外の仕事を色々やらなければならない、と以前から脅かされていましたが、残念ながらその通りでした。ただ、新たに参加することとなった学内や研究科内の委員会は、白眉のワーキンググループの場合と同じで、普段は話す機会の少ない教員ともコミュニケーションできる良い機会になっていると思います。また、委員会の業務内容もこれまであまり経験したことの無いものばかりですので、比較的楽しみながら取り組んでいます。



白眉センターに在籍した4年間の間は、研究の幅を広げ、研究者として生きるニッチを探すために、様々な試行錯誤を繰り返すことに費やすことができました。失敗に終わったことも多いですが、一部についてはようやく成果がまとまりつつあり、今後の研究の方向性もかなり固まってきたように思います。どうしても白眉時代と比べると、自分自身が研究に打ち込める時間は減っていますが、幸い2名の修士学生と1名のポスドクが私の研究グループに加わってくれています。日々彼らと実験して議論することで、白眉時代に播いた種をこれから大きく育てていきたいと思っています。

(いまむら ひろみ)

今村 博臣

第2期特定准教授・在職 2011年4月1日～2015年3月31日・2015年4月1日より京都大学生命科学研究科准教授

ポスト白眉の日常

藤井 崇

第4期特定助教・在職 2013年4月1日から2015年3月31日・2015年4月1日より関西学院大学文学部准教授

2年間の白眉での日々を経て、2015年4月より関西学院大学文学部西洋史学専修で准教授として働いています。高原の樂園を思わせるような素敵なキャンパスで、素直で優秀な学生を相手に、毎日楽しくやっています。担当授業コマ数は、だいたい週に5コマ+αといったところでしょうか。3回生、4回生向けの専門ゼミ、英書講読、ラテン語入門、1回生向けの人文学入門ゼミなどを担当しています。教務での最大の目標は、毎年10名前後のギリシア・ローマ史（わたしの専門）のゼミに所属する学生に、きちんとした卒業論文を書いてもらって、無事に社会に飛び立ってもらうことです。

白眉での生活と今の生活の違いは、よい点・悪い点、いろいろあります。一つずつあげましょう。よい点は、（とりあえずは）安定したポジションで教育と研究を続けていくことのできる見通しが得られたことです。白眉を含めて10年ほど奨学金やフェローシップに応募し続けて、もちろんそれはそれでエキサイティングで得るところの大きい人生でしたが、当面は公募に出さなくてもいいという安心感は、家族と

ともに生きていくという点だけでなく、研究を長期的なスパンで考えることができるという点でも、大きな助けとなっています。悪い点は、よい点と表裏一体なのかもしれませんが、生活の中での研究の優先順位を下げざるを得ないという点です。一般の教員の最大の義務は、校務と教育です。もちろん、今在籍している大学は、教員の研究を大いに奨励し援助してくれますが、研究への実際上の時間配分は、白眉の時のようにはいきません。白眉が特別待遇なので、これは当たり前なのですが、正直に申し上げて、わたしはこの変化にまだ戸惑っています。どうしたら、自分にしかできない、世界に向けた研究を、継続していくことができるのか。おそらく、多くの白眉が直面している、もしくはしていく問題だと思います。白眉の頃の刺激的な仲間を思い出しつつ、またこれからも白眉の在・離籍者と交流しながら、この壁をなんとか越えていきたいと思っています。

(ふじい たかし)

東北大学理学部合同棟から望む仙台市中心部の様子



私が現在所属している東北大学大学院理学研究科は東北大学の青葉山キャンパスにあります。写真からも分かりますように青葉山キャンパスは辺り一面、緑に囲まれており、理学研究科の建物の上からは仙台市内や仙台湾が一望できます。自然に囲まれたキャンパスは空気もおいしく、とても静かですので研究に集中するのにとても適した環境といえるでしょう。ただ、少し大自然に溢れ過ぎているようで、しばしば大学キャンパス内にクマが出没しているようです。この文章を書いている最中にも早速クマの目撃情報のメールが流れてきました。噂によると青葉山は2匹のツキノワグマが縄張りにしているそうです。東北大学の青葉山キャンパスへお越しの際は皆さんご注意ください。ちなみにクマに会った時は死んだ振りにはせず、走らないで落ち着いて立ち去るのが良いようです。

昨年12月には仙台駅から青葉山キャンパスまで地下鉄が開通し、町の中心部からのアクセスが大変良くなりました。以前は冬になり、雪が降ると夕方に青葉山から市内まで帰るのは困難を極め、いつ帰れるのか分からないような状態だったのですが、地下鉄が出来たお陰で市内への移動がスムーズになり、だいぶ快適になりました。仙台は海が近いこともあり、海の幸（とお酒）がとても美味しい所ですので是非白眉の皆さんにも来てもらえればと思います。

私は現在、東北大学のリーディング大学院プログラムに

も関わっており、その関係で物理や化学、工学など様々な分野の学生、研究者と関わりを持つことになりました。白眉プロジェクトに関わって以来、どうも私はそのような環境に縁があるようです。まだ白眉を離れて一年半も経っていませんが、自分とは専門が少し離れた方の発表などを聴いていると白眉セミナーや白眉合宿の記憶がよみがえってきて、白眉の時に関わった皆さんの顔が思い出され懐かしくなります。新しい環境の中でも白眉プロジェクトの中で培われた経験を少しでも生かすことが出来ればと思いつつ日々研究を行っています。皆様とまたお会いできる日を楽しみにしております。

(ちだ まさたか)

千田 雅隆

第1期特定助教・在職 2010年4月1日～2015年3月31日・2015年4月1日より東北大学理学部助教

Y UMEKUSA

エッセイ

研究者生活の多様性

研究者の生活というのは、各個人の研究テーマにおける多様性の如く、千差万別であると思う。白眉の輪に入らせて頂いてから実感している事であるが、分野により生活スタイルはかなり異なってくるものだ。だが、今回は特に子供を持つ女性研究者に着目してみたい。この場合においては研究者に限らない話ではあるが、(少なくとも今の日本の現状では)研究という職業生活にプラスして、育児、家事などを始めとする家庭生活を送る上での多様性に順応していかなければならない要素が大きい。

例えば私が関わっている臨床研究グループの一つは、大学院生を含めると構成員の女性比率は90%近くであり、また全員が子持ちである。このような状況下では、子供の急な病気などの不測の事態が発生する確率が上がるのに伴い、例えば臨床業務の交代や実験計画の変更等、急遽対処しなければならぬ事も増える。非常に理解のある上司のたゆまぬ努力によりこの様な現実に対応できているが、それと同時に、常に何らかの事態に対応可能な相互扶助の体制が半ば自然発生するようになったのは素晴らしい事であると思う。

研究、臨床、育児の間をぐるぐると回る生活を続けていると、身体的疲労も相まって呆然としてしまう事はままあるが、研究面に関していうと、このような軸方向の異なる性質のものに日々向き合うと、行き詰っていた研究の新たな方向性を見

飯間 麻美

出したり、新しいアイデアが浮かんでくるという事を私自身経験している。ただ偶然に起こった事象かもしれないが、頭の切り替わりがそのような気づきを与えてくれるのかもしれないとも考えている。この新たな気づきに繋がるという点に関しては、白眉仲間との交流により得られるものと少し似ているのではと個人的に感じている。

多様性は、積極的に活かすことにより大きな強みとなる。私の研究しているがんの多様性に関しては、その多様性に応じた研究、治療が進められ、立ち向かって克服していくべきものである。研究者生活の多様性においては、活かし方により研究において大きな推進力となるのかもしれない。

(いいま まみ)



人体用(左)と小動物用(右)のMRI装置
中に入る穴の直径は人体用が60cm、小動物用が21cmと大きさも違います。